

ミステリ読書案内

2022. 11. 13 発行元

第416号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

かつての名作・傑作・〇作

ちょっと変な題になってしまったが、2000年以前のミステリで、私が数冊しか読んでいない作家の作品を取りあげようと考えたのだ。今では忘れ去られつつある作品も紹介しておいた方がよいと思うから。

私の本棚にある本の紹介

2000年以降に出版された本は古書店に回しているので、私の本棚に残っているのはそれ以前の作品。有名作家はこの『ミステリ読書案内』で取り上げることも多い。でも、作品数が少ない作家に名作・傑作がないわけではない。「消えてしまふには惜しい」と思われる本を

紹介しようと思う。1970～1980年代の作品が中心になる。一回3作ずつだから、今後どの程度取り上げることができるだろうか…。

「忘れ去られ…」と思いついて紹介するのは私の主観であって、世の中では十分に評価されている作品も登場するかもしれないが、そこは勘弁いただきたい。多くの本を後世に伝えたいという願いなのだから…。

飛鳥高「細い赤い糸」

1961年光風社。私の手元にあるのは講談社文庫版。当時の日本探偵作家クラブ賞(現在の推理作家協会賞)を受賞した作品。飛鳥高は1947年ころから作家活動を開始しており、戦後の期待される作家だった。ただ、工学博士で建設関係の仕事も続けており、長編作品などの数は多くない。

本書第一章では水道公団管理部検収課の戸塚という人物が登場して、省庁とM工業やT鋼管などとの贈収賄事件が摘発されそうだと話が始まる。やがて、戸塚の上司の佐々木係長が自殺に追い込まれ、戸塚は深夜の国電のガード下で撲殺死体として発見された。どうやら鈍器で叩かれたようであり、頭部には木綿の細い赤い糸が残されていた。この後、第二章から第三章、第四章となるけれども、まったく別個のものに見える殺人事件が続く。第二の事件は若者の強奪事件絡みの交通事故。第三は縁談に関わる調査活動に絡むもの。第四は病院の勢力争いから生まれた副院長殺害事件である。被害者どおしの関連は見つけられず、殺人の手口だけが共通していることが気にかかるという具合。

「細い赤い糸」というヒントはあるものの、なぜ連続殺人事件になるのかが謎として最後まで隠されているところがポイントである。

石井竜生・井原まなみ 「見返り美人を消せ」

1985年角川書店。第五回横溝正史賞受賞作品。「見返り美人」は菱川師宣の有名な浮世絵であるが、ここで取り上げているのは切手のこと。日本切手の代表と言えば「月に雁」と「見返り美人」。(大型切手なので)私が子どもの頃あたりから、世は切手ブームになっていた。私も中学生頃から少しずつ集め始めた。学生の頃に止めたが、集めたものはまだ手元にある。(たいした量ではない)こんなに価値が下がるとは思いもしなかった。今では額面の価格でも引き取ってもらえないのが現状。宝物だったのに…。

本書はマンション4階のバルコニーから植木鉢が落下して下を歩いていた人物の後頭部に当たり死亡する場面からスタートする。植木鉢の持ち主が切手商の女性で、前夜初対面の男性と一緒に過ごし、その後のもめ事の争いの中で植木鉢にぶつかったと証言する。ここから切手絡みの話が展開していく。当時の切手の評価が馬鹿高く、切手への執着が現代の若者に通じるだろうか。切手を使つての暗号も登場。本のカバーも、表紙内側も切手の絵が勢揃いしている。作者は日本では珍しい夫婦での合作。

藤雪夫・藤桂子「獅子座」

1984年講談社。元になる作品は1955年の江戸川乱歩賞応募作品で、鮎川哲也の『黒いトランク』と争い次席となったものである。30年後、藤雪夫が退職したのを機会に「書き直してみてもどうか」の声が掛かって再挑戦した本。娘が原稿の仕上げに協力したので共著の形になっている。この作品の後『黒水仙』という作品も共著で出している。

プロローグは昭和27年で、戦争で夫が戦死し、幼い娘二人を育てている母親が土地を売ったお金をもらった後失踪した出来事が示される。そして30年後の昭和57年、第一部が開始になる。埼玉県の隈ヶ谷警察署に投書があり、9月8日の正午ごろ梓川にかかる仮の橋の上で男の人がピストルで撃たれたのを目撃したと書かれていた。離れた場所から見ていたので、現場に駆け付けた時には被害者は川の中に突き落とされ、犯人は逃走したとある。警察が川を攫ってみると婦人用の小型の拳銃が発見され、死体は下流で数日後に見つかった。被害者は金融業の支店長で、当日の行動が問題になっていく。部下は、支店長室に煙草の吸いかけが残されていたと証言したので、直前に呼び出されたと考えた。アリバイの問題になっていく。獅子座流星群は…。